



K377

K9

三年十月十日付「タイムス」。また女専生は、国文科が宇治の火薬庫で火薬を作り、保健科は大丸デパートの地下工場で飛行機部品を作った。被服科は校内で軍服修理、その他は西大路三条の島津製作所で部品製造に当たった。ことに女子商業学校生徒が、弥栄グラウンド劇場で風船爆弾を造った（昭和三十三年十月十日付「タイムス」という。生徒が動員されている一方、学園側では、女専維持財団を「財団法人龍谷女子学園」と改め、女専・高等女子学校・女子商業学校・保母養成所（昭和十九年二月本派本願寺保母養成所と改称）の四校は龍谷女子学園の四本柱となった。そして事務所を西本願寺内から東山区今熊野北日吉町十七番地に移行した。また龍谷女子学園の設立に際し、大谷光照門主は三校（女専・高女・女商）使用の校舎・校具・校地（現高校・中学校校地の北半分）を財団の資産として寄付された。京都女子学園は、まさに創立のはじめから門主大谷家の土地を拝借し学園発展の基礎を固めてきたのである。

昭和十六年十二月太平洋戦争突入以来、いわゆる銃後の国民は敵の本土空襲を予期させられ、日毎防空訓練に励んできた。兵役による召集で国内に若い男性の姿はほとんど無く、防空訓練をするのは主に女性だった。とりわけ女学校生徒は、銃後の精鋭と目されていた。

空襲に備え、手押しポンプの消火機使用に汗を流した。また縄モップを水に浸し、燃えさかる木材をたたいて消火したり、木綿の座ぶとんを水に浸し、発火中の焼夷弾（想像）をその座ぶとんでつかみ出す練習をした。バケツリレーで二階の火災を消そうと努力した日々もあった。そればかりではない。敵兵の本土上陸に備え竹槍で戦う訓練もあり、綿入りの防空頭巾と、外傷の用品や薬を詰めた救急袋は必携と決めてあった。一般の女性の化粧やパーマは心の敵だと否定され、「ぜいたくは敵だ！」「ほしがりません勝つまでは！」という標語を、真面目に肝に銘

じていた。

戦争は、そのようにして、日本人の感性を完全に狂わせていった。銃後では誰しも本土決戦の覚悟を強制され、またその決意であった。とはいふもののその一方、日本文化財の宝庫である京都は、よもや敵機の来襲もないだろうと、安易に思う一面もあった。万一に備えた訓練であったが、その万一が起きた。しかも学園の第三小松寮と幼稚園職員室と用務員室が至近弾で崩壊するという惨事に遭った。

昭和二十年一月十六日夜、B 29 一機が渋谷通り南側に沿って数発の爆弾を投下した。

一昨夜半B 29 一機、京都市に侵入、投弾。市民憤激新たに生産敢闘。

マリアナ基地よりB 29 一機が十六日午後十一時半頃京都に侵入、京都市内の一部に爆弾を投下、家屋等の倒壊をみたが、被害は軽微にして市民の士気は極めて旺盛、些の動揺もなく職場に挺身している

(昭和二十年一月十八日付『京都新聞』)

新聞による報道は機密保護のため、被害の事実はほとんど伝えていない。ただ一つ学園史の貴重史料ともいふべき「タイムス」所収の京女史口伝に当時の模様が詳細に伝えられている。

まず昭和三十六年二月十日付「タイムス」には、爆弾落下の予想位置と予想数を図面に描いたものがある。この図面で見ると、八発投下されたことになっている。このとき、町内を含む被害者のうち、死亡者は「百三人」(昭和三十六年三月十日付「タイムス」)。また寮生(第三小松寮)五人が倒壊した建物の下敷になった。だが、一人が頭部に負傷し、他の四人は軽傷であった。五人全員救出されたのは夜明けであったという。

爆弾の被害者は寮生だけではなかった。旧京都幼稚園の別棟になっていた職員室と用務員室が倒壊し、用務員

二名の方が生き埋め状態であった。しかしこの二人も無事救出されている（昭和三十六年四月二十日付「タイムス」）。夜中の惨事で救出に手間どったものの、火災発生がなかったので被害者は救出を待機できたのであろう。それと、自分の危険もかえりみず、寮生を案じて対処した寮監や、消防団員に劣らぬ積極さで救助や後始末に協力した先生・寮生、このとき従事した人々の無我の真心があったからこそ、学園の被害を最少限にいくいとめることができたのであろう。

翌昭和二十年八月十五日、正午。生徒たちは体育館に集合して、終戦を宣べる天皇のラジオ放送を聞いた。とにかくひどい雑音入りであった。生徒たちは、放送内容の要旨を伝える校長の説明で敗戦を知った。

これまで、生徒たちは白鉢巻のまん中に「神風」と墨書し、それをしっかりと頭にしめて、一日の勤労に励んできた。しかし現世利益的な「神風」は吹かなかった。

そして敗戦直後、軍国主義や国民精神の高揚を意図した書籍類・関係書類は指導により焼却した。ところが敗戦間もなくアメリカ軍のMPグループが二回も学園を調査に来た。一回目は事無くすんだが、二回目は徹底的に搜索された。「薙刀百六十本、木刀六十本、木銃若干、大国旗および小国旗千五百本などを摘発して焼却を命じた（中略）女専生の寄宿舍（錦華寮）の押入れまでくまなく調べるといふ念の入れかただった。こうしてグラウンドに積みあげられた軍国主義の残滓は、石油をかけられ、火が放たれ、ドス黒い煙を巻き上げながら、あとかたなく消えていった。」（昭和三十六年七月十一日付「タイムス」）

八月十五日の敗戦の日から、日本人は過去戦争の勝敗のみに血道を上げていた愚かさを知った。そして戦争のない真の世界平和を考えるようになった。戦争と平和のはざままで教育界はゆらいでいた。そのような中で、九月二十

三日、女專の操り上げ卒業式が行われた。二百七十名の卒業生が体育館に集った。卒業式には、昭和十三年二月まで在任した朝倉暁瑞元校長も臨席し祝辞を述べた。

本日ここに、第二十四回卒業式に臨み、祝辞を呈することを得るは、まことに欣快とするところなり（中略）
 今や大東亜戦争は天皇の御聖断により悲痛なる終結を告げ、諸姉の学徒動員中の労苦は今日より思えば徒労に
 歸したるが如くに思われる（中略）死の恐怖を克服し（中略）生きのびてきたこと（中略）あらゆる苦難の啓
 拓は、学窓を離れやがて家庭の人となりたる時に、必ず寄与する所あるを信じて疑わざる所なり（下略）

（昭和三十六年九月二十一日付「タイムス」）

朝倉翁の文語調の祝辞は、深く訴えるひびきがあった。学園で戦時に教鞭をとり、爆撃の煮え湯を飲まされた教師たちが、敗戦の現実を迎えたときの苦悩は想像を絶するものがある。またその苦悩は、生徒にとっても同様であった。

九月二十三日、卒業生を送る在校生の言葉に、卒業生一同声をあげて泣いたという。

わたし達は軍需工場の激労に堪えて泣かなかった。

身を刺すような厳寒の中でも泣かなかった。

餓えに迫まられても泣かなかったし、死に直面しても泣かなかった。

だのに、今わたし達は思い切り泣きたい。

（昭和三十六年九月二十一日付「タイムス」）

送辞の声は涙でとぎれ、すすり泣きはいつしか号泣にかわり、体育館は涙の坩堝るっほと化した。

そして、この涙の中から、学園には新しい平和教育の若木が芽生えた。それは仏教教育を通して、恵まれた人類

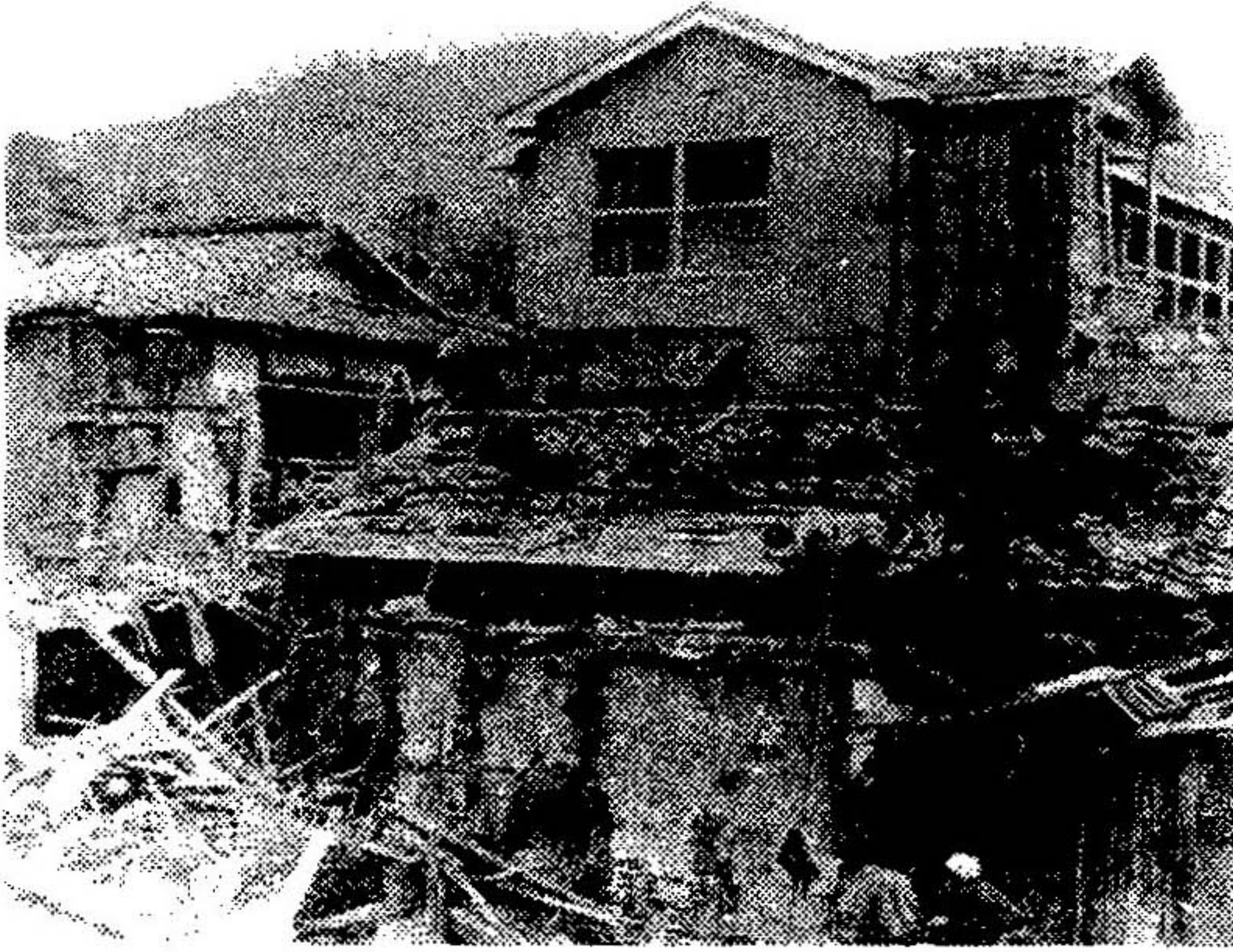
(資料19) 戦時下の学生生活「京女史口伝」より

昭和十九年遂に学徒動員令が発令され、男子学生は校内から直ちに営門へ、京女生低学年は農家に手伝いに行き、高学年は工場へ動員された。伊丹飛行場の設営で、涙して地ならしや草かりもした。

大久保日国飛行機工場で五年生が飛行機の部分品を作った。軍部の手前もあり飛行機工場の分工場のような形で学校工場を始めた。給品部前校舎の廊下教室、四、五、六校舎雨天体操場でジュラルミン製部分品(パイプ)、バイス台をおき旋盤もやりネチを作った。

太秦三菱電機では、四

年生が絶縁体、精密機械など飛行機部分品の製作に当った。よく頑張って作業成績もよく、出勤率は九九%。のち、桂・塚口などにも分散していたが、塚口で日本生命宿舎に入寮していた四年生「さくら会」が被爆。溝に入って避け、泥をかぶって生死を越え、団結して消火につとめたという



→爆撃を受けて破損した幼稚園舎

(昭和20年1月)

昭和二〇 (二九四五)	<p>一 空襲のため、第三小松寮及び幼稚園の一部に被害を受け、若干の負傷者が出る。 〔口伝〕</p> <p>四 京都市より防空壕の設置依頼をうけ、学園所有地に設置。 〔決録〕</p> <p>八 進駐軍、取り調べのため来校。薙刀・木刀・木銃・国旗等を押収してグラウンドで焼却。 〔口伝〕</p> <p>九 財団理事会、岩井栄之助が西本願寺に寄附した「京都幼稚園」の経営に当たることを決議。一〇月、設立者名義を岩井栄之助より龍谷女子学園に変更する件認可。 〔決録〕</p> <p>九 高等女学校・女子商業学校、三日より授業を再開。(女専は二五日より再開) 〔公文〕</p> <p>九 進駐軍が婦女子に暴行を加えるという風評が立ち、九月二五日より一〇月八日まで臨時休校。 〔口伝・京教史〕</p> <p>一〇 松信定雄、岩井龍二園長の後任として、幼稚園長に就任。 〔公文・決録〕</p>
昭和二二 (二九四六)	<p>三 女子商業学校、第一回卒業式を挙行。卒業生数八五名。 〔学籍〕</p> <p>七 女専、東亜科を廃止し、外国語科に(甲)中国語、</p>

美談もあり、この悲壯を極めた「さくら会」の名は今も語り継がれている。遂に清滝のトンネル工場にまで追い込まれた。

女専生は、国文科が宇治の火薬庫で危険な火薬作りを、保健科は大丸デパートの地下工場で飛行機部分品を、被服科は学内で軍服補修や襟章を作り、残る各科は西大路三条の島津精機で精密機械の製造に当たった。商業女学校の生徒は弥栄グランド劇場で風船爆弾張り。

(昭和33年10月10日付『東山タイムス』より抜粋)

歴代図書館長

氏名	在任期間
阪倉篤太郎	昭22・6 ~ 昭39・4
那波利貞	昭39・4 ~ 昭45・3
高取正男	昭45・4 ~ 昭49・3
小田義彦	昭49・4 ~ 昭52・3
村井康彦	昭52・4 ~ 昭55・3
狩野直禎	昭55・4 ~ 昭58・3
濱千代清	昭58・4 ~ 昭61・3
山田信夫	昭61・4 ~ 昭62・4
杉本秀太郎	昭62・5 ~ 昭63・3
田中英三	昭63・4 ~ 平2・3
松村将	平2・4 ~

昭和二三
二九四七

一二
連合国司令部の指令により学校美化運動を実施。軍国主義的・国家主義的意味を持つ形象物の除去、窓ガラスの整備、校庭・空き地の整理等を実施。これに伴い、奉安殿を撤去。
〔公文〕

三
増山頭珠、松信園長の後任として、幼稚園長に就任。四月、女専校長・高等女学校長・女子商業学校長(学園長)も同様に就任。
〔職員〕

四
大谷光明、大谷光照総裁の後任として、龍谷女子学園総裁に就任。
〔決録・往復〕

四
幼稚園、「園則」を制定。
〔決録〕

四
「京都女子中学校」を開校、初代校長―増山頭珠。第一回入学式を挙行。入学者数三一〇名。
〔往復〕

六
龍谷女子学園関係者により「京都女子専門学校昇格期成同盟会」を結成。八月、大学設置基準に適合するため二八教室を増築すべく、その経費五六〇万円の募集を開始。
〔往復〕

六
阪倉篤太郎、初代女専図書館長に就任。(後に大
学・短大図書館長)
〔履歴〕

九
女専、保健科を生活科と改称する件開申。
〔往復〕

一〇
今井秀一、増山校長の後を受け、高等女学校校長・女子商業学校長・中学校長に就任。
〔履歴〕

京都府立図書館



110151637

